

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】小澤 一郎

【所属】(助成決定時) 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

【研究題目】19 世紀におけるイギリスからイランへの「武器移転」現象の分析

【研究の目的】(400 字程度)

本研究は、19 世紀後半に武器や関連技術の地域間移転に生じた世界規模の変化を、イギリスとイランの関係から解明しようとするものである。19 世紀後半には、西ヨーロッパ地域や北米での武器技術の発展と時を同じくして、武器の供給元として民間兵器製造企業が勃興し、またそれら武器の受容を志向する国家が出現したことで、武器と関連技術の移転の方法に大きな変化が生じた。この変化は世界各地で武器の流通・使用に多大な影響を与えたばかりでなく、現代の武器流通のあり方をも規定している。今回の研究では、19 世紀のイランと、イランへの武器と関連技術の移転に 19 世紀を通じて関与したイギリスの事例を取り上げ、その過程を通時的に追うことで、世紀後半以降に武器と関連技術の移転をめぐって起こった全世界的規模の変化の実態を明らかにすることを目指した。

【研究の内容・方法】(800 字程度)

申請者はこれまで、イギリス政府を送り手とする「武器移転」現象に関して、主に本国における意思決定の観点から分析を行ってきたが、今回の研究はそれを拡充し、かつ新たな視点を取り入れる形で研究を進めた。そのため 2013 年 2 月にはイギリスでの史料調査を行った。現地での調査対象は以下の 3 つである。

第一の調査対象は、イギリス国立公文書館における外務省文書のイラン関係文書の調査である。特に、在イラン大使館側の文書(FO248)には、両者間の武器供与を巡る折衝についての現地側の情報が豊富に含まれており、イギリス本国の意思決定を中心に扱った申請者の研究を質的にも量的にも大幅に向上させる可能性がある。

第二の調査対象は、大英図書館のアジア・アフリカコレクションに所蔵されているインド省文書である。イギリスからイランへの武器供与において、送り手としての英領インドの重要性はとりわけ 19 世紀前半には大きく、当該時期の「武器移転」現象のあり方を考える上で非常に重要である。

第三の調査対象は、エディンバラのスコットランド国立公文書館に所蔵されている、1830 年代の駐イラン大使の関連文書である。この文書群はこれまでの研究動向の中で十分に分析されることがなかったが、武器および関連技術の移転に関して現地側の事情を伝える貴重な史料である。今回は、1830 年代半ばに軍事援助の一環として試みられたイラン西北部における鉱山・鑄造所の創設に関する文書を重点的に調査する。

現地調査終了後は現地調査において収集した史料を、既に収集済みの史料と合わせて用いることで①これまで行ってきた 19 世紀前半におけるイギリスからイランへの武器供与の分析の補完、②1830 年代の鉱山・鑄造所開発の試みの分析、③19 世紀後半における武器の「非公式」取引について分析する。

【結論・考察】(400 字程度)

現地調査では以下の成果があった。①国立公文書館では、FO248 文書で当時イランに駐在していたイギリス軍人や技術者の書簡が発見されたほか、武器移転とも関係する軍事関連全般の史料を収集でき、現地での武器の移転・受容の実態がより明らかとなった。また 1870 年代以降のイラン西部における武器の非公式取引に関する史料も収集できた。②大英図書館でも同様に、主に 19 世紀前半のイラン関連文書を調査した。①の文書と一部重複があったものの、とりわけ移転した武器の受容・利用に関して興味深い情報を含んでいた。③スコットランド国立公文書館では、鉱山・鑄造所の創設についてその経過や問題点を具体的に示す史料が確認された。これらの成果を利用し、1830 年代の鉱山・鑄造所創設と、1870-90 年代の武器の非公式取引の問題に関してそれぞれ論文を準備中であり、完成次第学術雑誌に投稿予定である。